学院史編纂室共同研究報告

二〇〇二年度から始まった共同研究は、二年間を一区切りとして活動をしているが、第五期の一年目に当たる二〇一〇年度は次のテーマ・研究組織で行った。

研究テーマ	研究員
院長研究 ―ランバス、ニュートン、ベーツ―	○神田　健次（神学部教授） 池田　裕子（学院史編纂室） Daniel Harald Dellming（高等部教諭） 舟木　譲（経済学部准教授） 山内　一郎（名誉教授） 山本　栄一（名誉教授）
関西学院の戦前・戦中・戦後	○井上　琢智（経済学部教授） 井戸田史子（大学図書館） 打樋　啓史（社会学部准教授） 神田　健次（神学部教授） 田淵　結（教育学部教授） 辻　学（広島大学大学院教授） 中道　基夫（神学部准教授） 福井　幸男（商学部教授） 山　泰幸（人間福祉学部准教授）

（○印・主任研究員）

一　院長研究―ランバス、ニュートン、ベーツ―

これまで、ランバス、ニュートン、ベーツを中心に継続して研究してきている。神田主任研究員は、引き続き「草創期のエキュメニカル運動とW・R・ランバス」という研究テーマで研究を進めてきている。

また、山内研究員共々キリスト教学校教育同盟の一〇〇年史編纂委員会との関わりで、昨秋は『百年史年表』を刊行したが、その編纂作業の中で、これまで殆ど研究されてこなかった戦前の教育同盟と関西学院の深い関係について資料の収集を行った。わけても、全国のキリスト教主義学校における「キリスト教教育の原理」作成に大きく貢献したベーツの働きをめぐって資料収集と考察を行った。

なお、院長研究との関連で、韓国メソジスト教会宣教師の洪伊杓氏を招いて、昨年の十二月に朝鮮半島におけるW・R・ランバスの宣教活動について学院史研究月例会の講演会を開催し、その内容を本誌に掲載した。

山内研究員は、昨年の八月、W・R・ランバス著の“James William Lambuth（1830 ― 1892）: Thirty-eight years an active missionary”（Board of Missions, MECS,1893）の内容を紹介し、「建学の祖父 James W. Lambuth」というタ

イトルで神学部同窓会の成全会で講演し、その内容は成全会パンフレットNo.1として刊行された。

デルミン研究員は、ここ数年取り組んでいる『ベーツ日記』の翻刻チェックの成果を「『ベーツ日記』に見る第四代院長、カナダ・メソヂスト教会宣教師C・J・L・ベーツのスピリチュアリティーについて」としてまとめ、『学院史編纂室便り』第三二号で紹介した。

池田研究員は、昨年に引き続き、「院長研究」の成果を短くまとめ、広報誌『K. G. TODAY』（偶数月発行）に発表した。今年度の記事は「生みの親より育ての親」「関西学院とカナダ」「夏休み前の午餐会」「"Launch out into the deep."（ルカ伝五章四節）」「30年来の旧友―ベーツとマシュース―」「アイゼンブルグ少年のレプタ」の六本である。二〇一〇年はベーツが関西学院に来て百年に当たったことから、ベーツを意識した内容を紹介するよう努めた。これらの短文は、吉岡記念館の協力を得て、インターネットでも公開している（日本語・英語）。読者からの要望に応え、これまで発表したものをパソコンで打ち出し冊子（試作品）にまとめたところ、好評であった。

年二回発行の『学院史編纂室便り』には、「故郷ロリニャルのC・J・L・ベーツ」（三一号）と「お宝拝見！　②ランバス一家の通訳鈴木愿太とその家族」（三二号）を発表した。後者は、当紀要第十二号に掲載された「南メソヂスト監督教会日本伝道の初穂、鈴木愿太の生涯―宣教師ランバス一家との関わりを中心に―」の続報とも言うべきもので、読者（斎藤潔さん）から寄せられた情報をもとに、愿太の故郷仙台で行った調査の一端を披露した。この訪問により、愿太の四男七郎さん（九八歳）にお目にかかれたことは大きな喜びであった。

さらに、二〇〇八年一〇月にペーテリス・ヴァイヴァルス初代駐日ラトヴィア共和国特命全権大使からいただいたラトヴィア語論文の日本語訳がついに完成し、本号に掲載することができた。翻訳をお引き受けくださった田中研治先生のご協力に心から感謝申し上げます。これに併せ、『学院史編纂室便り』第二六号掲載の「関西学院のラトヴィア人教師イアン・オゾリンをめぐって」に手を加え、「関西学院のラトヴィア人教師イアン・オゾリンとその教え子―曽根保と由木康―」として当紀要に転載した。この結果、これまで不明部分の多かったオゾリンの生涯について、ラトヴィア側に残る資料と関西学院側に残る資料を突き合わせて辿る道を示すことができた。

主任研究員　神田　健次

二　関西学院の戦前・戦中・戦後

今年度から始められた学院史編纂室共同研究のプロジェクト「関西学院の戦前・戦中・戦後」（第五期）は、各研究員が多忙であったために、残念ながらほとんどその成果をあげることが出来なかった。その中で井上琢智は「奉安庫―その後―」を『学院史編纂室便り』第三二号で公表した。なお、戦前・戦中・戦後の甲東園近隣に居住する関西学院教職員の住所録については、その成果を公表できなかった。

また、辻研究員を中心とする蛭沼寿雄『新約本文のパピルス』第Ⅲ巻の公刊事業については、ご遺族をはじめ、多くの方々のご協力を得て、昨年一一月に公刊され、高い評価を得ることができた。現在は、ご遺族から寄せられた多額の寄付をもとに『蛭沼寿雄著作集』（仮題）の編纂に取り組んでおり、来年度中の公刊をめざしています。学院史編纂室は今後このような関西学院関係者の遺稿出版にも協力していきたいと思います。

主任研究員　井上　琢智

【前号（『関西学院史紀要』第十六号）の訂正】

輕部　潤「名曲『U Boj』のルーツと関西学院グリークラブ」の訂正について

（『関西学院史紀要』第十六号、九九頁）

（誤）「幸いチェコ軍の中に英語の話せる士官のチョーロッカー大尉がいた」

（正）「幸いチェコ軍の中に英語の話せる士官のハロウプカ中尉（Lieutenant Choupka）がいた」

（経緯）執筆に際し、筆者は当時の『毎日新聞』の記事に基づき「チョーロッカー大尉」と記述しましたが、北海道大学大学院博士課程に留学中のチェコ・プラハのカレル大学助手　マルティン・ホシェック（Martin Hošek）氏が「プラハのチェコ軍隊中央公文書館」に保存されている「神戸に滞在したチェコ軍資料」から探し出され、正しくは「ハロウプカ中尉（Lieutenant Choupka）」であることが判明したとの報告を受けましたので、ここに訂正させて頂きます。恐らく、毎日新聞記者は走り書きのスペルを写し違えた上に発音も英語読みでカナ書きしたものと思われます。この場を借りて、調査をして下さったマルティン・ホシェック氏に厚くお礼申し上げます。

（輕部　潤）